

テキスト2

画像の絵画と観念の絵画について

いくつかの抽象絵画を見ていると作品を鑑賞するに従って「絵画とは何であるのか」という問いが浮かんでくる。

その問いはその絵画が具体的な物を何も描いていないからこそ、よりいっそう浮かんでくる問いである。この問いは「この作品は何であるのか」という疑問から派生したものだ。何が描いてあるのかが分からなければ何が描いてあるのだらうと思ったり考えたりするように、絵画らしくない絵画だからこそ絵画自体について考えるきっかけになるのである。

ここでは私の絵画制作の動機ともいえる絵画を見た時に感じる疑問と考察について述べる。それは抽象絵画に限らず私たちが絵画というものを見るときに現れる絵画特有の経験に関係する事柄である。

こうしたことを考えるきっかけを与えてくれる作品は少なくないが、私にとってはバーネット・ニューマンの『アンナの光』がそういったことを考える最初のきっかけとなった絵画だった。

具象絵画では支持体と描画材という絵画の物質的な基盤〈A〉によって何らかの対象〈B〉を表象(再現/代理 representation)する。例えばキャンバスと絵の具〈A〉で人物や風景という〈B〉が描き表される。

抽象絵画でも、描かれた何らかの抽象形態が具体的な対象物として見えることはよくあることだろう。しかしニューマンのように二、三の(線であり面であるジップと呼ばれる)色帯があるのみならば、かなりこじ付けなければ対象物が描かれているようには見えない。それでもキャンバスの実寸の大きさと異なる"空間の広がりや奥行き"が感じられたり、色帯によって視線が誘導されて画面に動きが感じられる。これは具象絵画のように空間を表象していると言えるのだろうか？またその色彩によって何らかの感情を喚起させる。例えば広い面積の赤い色によって高揚感のようなものを感じられる。これは色によって感情を表象していると言えるのだろうか？

これらのことが表象と言えるのかどうか私には、はっきりと分からない。なぜならニューマンの絵画は物体として見えることと表象として見えることとの間を大きく揺れ動いているように私には感じられるからだ。

おそらく抽象絵画は、表象と物体との境界、表象と図表との境界が曖昧である。例えば幾何学的な抽象絵画であるのか、ただ規則的な線が引かれたり、色が塗り分けられた物体であるのかははっきりと区別することが出来ない。もしもそれが美術館のような場所に展示してあったり、それが絵画であると言われていなければ誰もが具象絵画と同じようには絵画だと思ふ作品ばかりではないだろう。

こうした絵画の先例としてカジミール・マレーヴィチの『黒の正方形』やニューマンの『ワンメント』、フランク・ステラの『トムリンソン・コート・パーク』などが考えられる。このような先例となる作家と作品の数は特にシュプレマティズム、ロシア構成主義、ミニマリズム、これらに関連する何人かの作品を加えることで更に増えるだろう。

私がここで注目した作品に共通した特徴を乱暴ではあるがまとめるとすれば、それらの絵画の特徴は画面の外形である四角形を画面内で繰り返したり、あるいは画面の四角形の形から演繹した構成単位(module)が使われている。それによって与えられた空間内を恣意的に構成(composition)したというよりも画枠を意識させる構造的な構成(construction)に見えるようにされている。これらの作品は比較的絵画というよりも物体のように見える。なぜなら描かれた構成は支持体である物体の形とほとんど重ね合わさっているからだ。このことによって物体感が強調されて指し示されている。

これらの作品は作品自身の支持体や絵の具を表象していると言えるのだろうか？言い換えれば物質的基盤〈A〉によって対象〈A〉というそれ自身を表象するという、そんなことはあり得るのだろうか？

表現するもの(媒体)と表現されるもの(対象)が限りなく近づけられることによって絵画を成り立たせているものが何であるのか問われている。

一つ仮定の絵画を考えて見よう。何も描かれていない絵画、対象物もなければ表象もないような絵画である。このような絵画はあり得るのだろうか？

私ならば白いキャンバスのようなものを想像するが、それが果たして何も描かれていない絵画だと言えるのだろうか？

想像上では、はっきりとしないが、実際に私たちが経験する絵画はキャンバスや紙などの物体が伴う。少し問いを変えてみよう。何も描かれていないキャンバスや白紙は果たして絵画だと言えるのだろうか...？

これに対しては二つの応じ方があると思う。

一つは「それらは絵画ではない」という応えだ。なぜならキャンバスや白紙は物体ではない。絵画というのはその物体の中に何かの対象を見ることだからだ。絵画とは画像という表象だ。少なくとも何らかの像が現れることで初めて絵画といえる。

ここで注意が必要な点は画像表象というのは"像として現れた対象"言わば無いものがある様に見える幻影(illusion)のこのみを指すのではなくて"物質的基盤を通して対象の像が現れるという関係"のことを含めていると考えた方が良いことだろう。つまり画像表象は像を見ることだけではなく、絵の具などの物質であることがわかっているのに描かれている像をそこに見る経験であるからだ。この二重性が画像表象である。

次に以上とは反対の応えを考えてみよう。「それらは絵画である」なぜならそれらはまだ描かれていない、もしくは描いていない絵として見做すことが出来るからだ。あるいは雪や光によって完全にホワイトアウトして見えない状態であると見做すことが出来るかも知れない。絵画を絵画にするのはそれを絵画であると見做す行為である。絵画のように見えるのであればそれはある種の絵画なのである。こうしてキャンバスや白紙はレディメイド(既製品)のミニマル(最小限)の絵画となるからだ。

上記二つの応えのうち、一つめは画像の絵画と言えるし、分類上最も一般的な絵画群であり、伝統的な絵画観であり、描写によって作り出された表象に繋がっているとも言える。二つめは観念の絵画と言える。と同時にレディメイドを絵画として見る。という考え方でもある。レディメイドは既製品が選び出されることによってアートとして成り立つ。レディメイドを絵画として見ることによって絵画は創作されるものというよりも既にあるものを絵画として見出すことへと変わる。一例を挙げれば、ジャスパー・ジョーンズが星条旗を描いた『フラッグ』を知った後では、旗を見るときに、たとえ『フラッグ』のように、いかにも描出したというような強い筆跡が残されていなくとも私たちは絵画を見るように旗を見ることが出来る。そうであるなら、旗に限らず絵画と似た形式のものを絵画として見てしまうことは必然的かも知れない。現代の芸術、アートの現在形であるコンテンポラリー・アートに繋がる絵画観はこちらの観念の絵画であるように思う。コンテンポラリー・アートとはレディメイドという概念を起源の一つとする広義のコンセプチュアル・アートであるのだから。レディメイドという概念は既存のアートの概念に疑義を呈しその概念を拡張するように促してきた。実のところ観念の絵画は使う材料の種類や絵画という名前がついていることに拘らずコンセプチュアル・アートなのだろう。

画像の絵画とコンテンポラリー・アートの対立とまで言わなくとも、コンテンポラリー・アートの中に画像の絵画を位置付け難くなってきたように思えるのだが、その理由の一端は画像の絵画とコンテンポラリーアートの先に述べたような前提の違いにあるのではないのだろうか。レディメイドはそれまでのアートの伝統や慣習を解体し、もしかしたら絵画の見え方も変えたかも知れないが、物体の中に像を見るという画像の不思議さまでは解消しなかった。

私たちは絵画を見ることと現実のものを見ることの差を十分に理解していると言えるのだろうか？絵画に描かれているものを見ることと現実のものを見ることは明らかに違うことなのにその差を説明することは意外と難しい。このような事柄はどちらかといえば美学や哲学の問題であるが、絵画独特の要点、もう少し広く考えても画像独特の要点であると思う。

画像の絵画と観念の絵画の二つに違いばかりではなく共通点があるとしたら、何かを別の何かに変えているということであろうか。画像の絵画は物体を像に変え、観念の絵画は見えるものを物体という観念から絵画という観念に変えている。

いずれにせよ "何かを別の何かに変える「変換」のこと" である。もしも借り物でない絵画の形式で何か描きたいのならば、"何かを別の何かに変える" というこの「変換」自体を創出する必要があることを意味するのだろう。

同じ絵画を何度見ても初めてその絵を見るような感覚がある。より正確には音楽の曲やお伽噺を一度きりではなく何度も繰り返し聞くように"その絵を最初から見る"という感覚である。(これは繰り返し新たに世界に出会うと言うことに似ている)

私は絵画のある種の変換のこととして捉えている。その理由は、私の描きたかったものが、この"関係を結び直す瞬間"にあるからだと思う。